
敦君の嫁探しっ！

織田一菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

敦君の嫁探しっ！

【Zコード】

Z3796S

【作者名】

織田一菜

【あらすじ】

口は悪いが容姿端麗、頭脳明晰、おまけに運動神経抜群な高校2年生、音羽敦。

モテる要素は数多あれど、恋愛に対しても奥手で鈍感なため、付き合った経験はナシ。

そんな彼が、祖父の一言で、いきなり嫁を探すことになー!? 幼馴染やメイドをも巻き込んでの騒動は彼らの日常に波乱を巻き起こす。

最後に彼が選ぶのは

キャラ紹介（前書き）

織田です。

新しく連載始めました。
よろしくお願いします。

キャラ紹介

おとわつし
音羽敦

身長185センチ、体重71キロ、A型。17歳。
世界的大企業『TOWA』の社長、昭一の孫。
やや細身だがしつかりと筋肉はある。

容姿に優れ頭脳明晰、運動も出来ると好条件そろっているが、超鈍感。

おとわつし
青羽昭一

身長188センチ、体重82キロ、A型。55歳。

世界の大企業『TOWA』の社長。

見た目はとても孫がいるようには見えないほど若々しく、筋肉隆々
だが、喋りは年寄り臭い。

お茶目な一面もあるが早くに親を亡くした敦をかなり気にかけてい
る。

ゆくゆくは才覚ある敦に社長を継いでほしいと願っている。

椎名未来
しいなみらい

身長178センチ、体重68キロ。A型。17歳。

図書委員。

敦の幼馴染の一人で萌の姉だが、全く似ていない。
モデル並の容姿と優れた記憶力、それを生かす知恵がある。
ただし本人は胸が小さいことを気にしている。
髪が極端に長い。

かなりモテるが、とある理由で告白はすべて断つている。

椎名萌乃
しいなもえの

身長147センチ。体重46キロ。O型。16歳。

敦の幼馴染の一人で未来の妹だが、全く似ていない。

小柄ながらスタイルが抜群に良いが、本人にとつてはコンプレックス。

学校の勉強は出来る方だが、あまり頭は良くない。

力チュー・シャをずっとつけている。

かなりモテるが、とある理由で告白はすべて断つている。

特に委員会にも部活にも所属していない。

ひむろひかる
氷室光

身長184センチ、64キロ。B型。17歳。

料理部所属。

敦の幼馴染の一人。

『TOWA』には及ばないが、結構大きな会社の社長令嬢。

底抜けに明るく、誰からも好かれる。

他の二人に比べると運動は出来るが、学校の勉強は出来ない。グラビア並のプロポーションだが本人にとつてはコンプレックス（というよりも、単純に邪魔だと思っている）。

また声もかなりハスキーダがそれは気にいつている。

かなりモテるが、とある理由で告白はすべて断つている

ななみやえり
七宮絵里

身長167センチ、体重52キロ。A型。22歳。

敦の世話をするメイド。

元は社長令嬢だったが、会社が倒産寸前だった所を『TOWA』に救われた礼にと大人同士の意向で敦の世話することになった。

かざまきじゅんぺい
風巻順平

身長183センチ、体重68キロ。B型。17歳。

敦の悪友で、祖父や幼馴染三人より付き合いは短いが、四人よりも敦のことを理解している。

光や萌乃をからかっているが、基本的には仲は良い。

あかがねみさき
銅実咲

165センチ。体重51キロ。O型。

敦達の担任教師。担当は社会。

美人でスタイルもよく童顔。

敦とは小さいころからの知り合いで、昔はよく勉強を教えていた。

敦が鈍感になつたきっかけの遠因。

第一話 そもそもなぜして敦君が嫁を探さなきゃいけなくなつたのか

「曾孫が見たいのぉ」

俺の目の前に座つてゐる、とても高校生の孫がいるとは思えない若々しい姿をした大男 世界的企業『TOWA』の会長にして、非常に忌ま忌ましいことに生物学上では俺の祖父 青羽昭一が、食事中に突然呟いた。

「は？ ついにボケたかこのもつろぐクソジジイ」

「言ひ過ぎじや」

ジジイは言葉とは裏腹に嬉しそうにツッコミを入れる。

俺は当然の『』とくスルーして自分の話を続ける。

「何が曾孫が見たいだ、だいたいその歳で曾孫がいる奴見たことねえよ。ギネスにでも載る気か？」

俺はこの男をジジイと呼んでいるが、実際のところまだ55歳を越えたばかりだ。

喋り方が古臭いわりに若い。

「それは若くして儂が勇人はやとを、勇人がお前を生んだからじゃねつへ」

勇人は俺の親父の名前だ。

ジジイは19歳で親父を、親父は20歳で俺を産んだ。

「どうちこじろ、俺には無理だろ。相手いねえし」

「ヤレヤレ…」

「こきなり大声出すなジジイ」

「お前は儂や勇人に似て容姿端麗、頭脳明晰、おまけに運動神経抜群といつのに 17にもなつて、まだ浮いた噂一つない！」

「さりげに自慢してくるんじゃねえよ。つていつか、浮いた噂あつたほうがいいのか？」

「当たり前じゃらうが。その歳にもなつて女の一人も抱いたことがないとは 嘆かわしい。彼のガンジーは13の頃からすでにやることやつていたそうじゃぞ」

「知らねえよ。そんな偉人と比べるんじゃねえ

「偉人に並び立とうと思わんのか」

「そんなとこだけ真似してどうすんだ」

「お前にはそんなとこへらいしか真似出来るところはあるまい」

「そこを真似した所で行き着く先は確実にダメ人間だろ」

「むう、これだけ言つても儂に曾孫を見せぬ気か」

「いや、あなたガンジーの話しか聞ひたくないからな

「どーしても儂に曾孫を見せぬと叫ひたのか?」

「別にどーしてもってわけじゃねえけど、今すべは無理だわ

俺がそう答えるとジジイは頭を抱えた。

「そんなに曾孫が欲しいのか?」

「産む気になつたか?」

「なつてねえし俺は産まねえ 単純な興味だ」

俺がそう答えると、ジジイはさもがつかりました、とこいつ顔をする。

「 その顔すっばえウザいんだナゾ」

俺がそつまつとジジイは深い溜め息をついて真剣な表情になる。

流石に世界をまたにかける大企業の社長だけあって、その表情には凄みがある。

「それじゃ。お前はどういうわけだかお前をあんなに一生懸命に育てた儂に向かつてそんな汚い言葉を使ひねくれた男になつてしまふた

「いや、あなたが育てたからだと思つが

「

俺の両親は俺が生まれてすぐに死んだ。

だから、俺を育してくれたのは「ジジイ」と何人かの家政婦だった。

「だいたい、そつも嬉しそつシシルーハしてたじやねえか」

「あれは久々に孫と会えた喜びじゃ　とにかく、お前がそんな風に育ってしまったから、儂は思ったのじやみ曾孫が欲しいと

「何で?」

「ヒトなこひねくれた孫よりも可愛らしい曾孫の方がいいじゃねえが

「帰るぞ」

「冗談じゃ。今のお前のままでは安心して『トトロ』を任せられるのじや」

「別に継ぐ気ねえし　曾孫とどう関係するんだ?」

俺がそう言つと、ジジイはまた溜め息をつく。

「子供が生まると人は変わるんじやろ　手のべきものが出来るからな。儂も勇人もそうじやつた

「だから、俺も曾孫作つて変われってか?」

俺が訊くと、ジジイは頷いた。

「うやうりー 応ジジイなりに考えがあつたようだ。」

俺も一応考える。

生意気なこと言つても、様々な面でいつも助けてくれているジジイには感謝してるし、出来る限りジジイの望む通りにしてやりたいとは思つ。

だけど

「こきなり言われてもなあ」

いくらなんでも、相手もいない状況じゃ曾孫どころか結婚もありえない。

だいたい俺はまだ17だ。

結婚は出来ないし、子供を作ると世間体的にもやばい。

「せめて恋人くらいなら つくれないこともないかもしねないけどな」

俺が何気なくさう言つた瞬間、ジジイの目が輝きだす。

「ほひ、といひとはあてがあるんじやな？」

「いや、ないけど」

「まあ、子供にも及ばんが 恋人も守るべきものに相当するんじやろ」

「おい、ちょっと待て、なにって言つてるだろ」

「いや、その恋人と婚約までいけば　嫁をもらひと同義　いや、法律を変えれば結婚も出来る」

「人の話聞けつ！　つてか勝手に話進めんな！　何もう告白成功する前提なんだ！　相手いないつつてんだろうが！」

「(S)まで来たら恥ずかしがらんでもいいじゃん」

「いや、恥ずかしがつて隠してゐわけじゃねえからー　本当にいないだけだつて！」

「またまたあ」

「ジジイ(ゼ)ええっ！」

結局誤解は解けず、俺は恋人を探して婚約することになってしまった。

とりあえず、今田の教訓は『発言には気を付ける』だな

第一話 もともとひつて敦君が嫁を探さなきやうになくなつたのか（後書き）

誤字脱字がございましたらは感想ページか
ブログ

http://syousetuukaniblog133.fc2.com/mixi
http://mixi.jp/show_profile.php?id=33773541&from=navi
にてお願いします。

第一話 敦君とその幼馴染達

「　　といつわけなんだ、協力してくれ

俺は呼び出した三人に向かつて言ひ。

「協力つて　私たちは一体何をすればいいの？」

いつもと変わらない無表情でそう言つたのは椎名未来。

腰まである長い黒髪を首の辺りで束ねていて、一度、邪魔じやないのかと訊いてみたといふ、おもいつきり睨まれた。

おそらく何らかの思い入れがあるのだろうが、もつて一度と訊く気にはない。

「だから、お前達にジジイの頼みを手伝つてもらいたいんだよ」

「そ、それって　も、萌達に恋人になれつてことですか？」

「そ、言つてそわそわしているのは椎名萌乃、愛称「萌」。

歳は俺達より一つ下で未来の妹だが、全然似ていな。

姉が綺麗というカテゴリーで括られるなら、彼女は可愛らしこと言うカテゴリーがぴったりとくるような感じ。

襟首のあたりで切られたボブカットに、つぶらで大きな瞳、ちょっと
ぴり猫のような愛らしい口元で、髪型も姉とは違いセミロングの茶
髪に以前俺が誕生日にプレゼントしたカチューシャをつけている。

身長も女性としてはかなり背の高く、足も長いが良くも悪くも起伏
がほとんどない未来に対し、萌はかなり小柄が出るべき所はしつ
かりと出て、引っ込むべき所はきちんと引っ込んでいて、かなり起
伏が激しい。

性格もクールで冷静な姉とは異なり、どこかぼわぼわしていておつ
とりしている。

似てる所が全然ない姉妹だが、男子にモテるという点では似ている
が、不思議と誰かと付き合っているという話は聞かない。

「いや、そういうことじゃなくてだな　俺をモテる男に改造して
くれ」

「　そういう相談はダイジヨーブ博士にでもしろ。野球もつまく
なるべ。確率は低いが」

呆れ顔で言つのは氷室光。
ひむろひかる

『TOWA』には劣るが、かなり大きな会社の子供、つまりかなり
のお嬢様だが、容姿も言動もかなり男っぽい。

身長は男の俺と同じくらいあり、声もかなりハスキーだ。

茶色のベリーショートの髪型に、大きな特徴的な唇、意思の強そう

な大きな瞳はなんとなく野生の虎を連想させる。

グラビアアイドルよりも凄そうなプロポーションとがさつながらも持ち前の人懐っこさで男女問わず人気がある。

未来、萌、光の三人は俺の幼なじみで、小、中、高と同じ高校を選び、未来、光とは全て同じクラスという奇跡的な仲で、おれら一一番俺と仲の良い友達だと思う。

こんな恥ずかしい事を相談出来るのはここいらへんしかない。

「いや、そんな一部にしか通用しないボケがまされても」

「ボケじゃねえよ。つづつか、お前の言つてることがボケだわ」

「へ？」

「へ？　じゃねえよ」

「最悪なぐらい鈍感ね」

「あの、気をつけないと嫌味だと思われちゃうですよ？」

三人が呆れた表情で（未来は溜め息付きで）俺をジーッと見つめる。

「な、何だよ　」

三人は同時に後ろを向く。

（どうしよう、これ　）

(「どうあるべきあるも ）

(「せりんと言いつかないです ）

「なに」アリを話してゐるんだよ」

俺が訊くと三人は同時に俺を向く。

「あああつと　お前に残念なお知らせといつか喜ばしいお知らせ
とこつか」

「まあ、悪くはないと思つけど

「敦さん、もう十分すきなほどモテると思つです」

三人があこまない表情で言ひ。

「はあ？　どうが」

モテていいたらこんな恥ずかしい相談するわけがない。

「お前の前のバレンタインデーのロードレースのチョコももった？」

光が急に話を振ってきた。

「えつと　いへつだつけ？」

「少なくとも、紙袋が必要になるくらいにはもうつてたわ」

「確かに紙袋三つくらいを持ってたです」

「うだつたつけ つていうか、ここにひりよく覚えてるな。」

「昨年のクリスマス、あなた何人に誘われた?」

今度は未来が話を振る。

「覚えてないけど、結構多かったと思つ」

「そのうち何人女子だった?」

「そこまで覚えてるわけないだろ」

「確か、9割方女子です」「

だから、こいつら記憶力よすぎだろ

「誕生日のときも、色々な女人からプレゼント貰つてたです」

「まあ、ありがたいことにな」

学校でみんなから有り余るほどのプレゼントをもらつた。

「な、モテでんじやん」

「いや、ビリがだよ」

今までの話ごとにそんな要素が ?

(なあ、今の流れで分からなーってどういふこと?)

(まあ、正直今更だけど)

(でもこ^レは鈍感すぎるんですよ)

「だから向こうに話てるんだよ」

俺の言葉に反応するよ^{ヒテ}三人は同時に俺のほうを向く。

「お前なあ 女子から誕生日プレゼント^{ハツシヨウ}」そり貰つて、クリスマスに女子から誘われまくつて、バレンタインにめちゃくちゃチョコ貰える奴のどこがモテない男なんだよ!」

「誕生日にプレゼント貰えたのはその人にプレゼント渡してたからだし、クリスマスに呼ばれたのはクリスマス会みたいのだし、バレンタインに貰つたチョコ全部義理だし、モテてるつていうよりも友達が多いってことだろ」

「でも女子から良い感情がなければそつはならないわ」

「異性として良いかと友達として良いかはまた別だと思つけど」

「それは そうかしれないんですけど でも普通いくら友達でも男の子をクリスマスに呼んだりはしないですよ」

「うーん でもその、結構男子呼ぶれてたぞ」

「あんたと同じモテるのに彼女がいない人達がね」

俺達が意見を交わしていると、光が手を挙げた。

「どうかした？」

「そもそもさー」

「何？」

「告白されるのを待つより、告白しに行つたほうが早いんじゃない
か？」

「光！」

「何言つてるですか！」

光を未来と萌が取り押さえて部屋の隅に連れていく。

（あんたバカ？ それで敦がほかの女のところにいったらどうする
の？）

（いや、十年以上も一緒にいて俺達の気持ちに気がつかないアイツ
だぞ！？ じうじうときはけよつと刺激与えたほうが ）

（じうじう状況だからこそ、何するかわからないです！！）

「あの、三人とも、俺置いてけぼりにしないでくれる？」

俺が三人に言うと三人ははつとした表情で俺を見る。

今日の三人はなんか変だ

「こっかし、告白する相手かあ

」

正直、全然考えてなかつた。

そつか、わざわざ相手の好みに合わせて告白を待つより、そつちのほうが手つ取り早いよなあ

「ももももしかして、告白する相手がいるですか？」

萌がかなり慌てたような様子で俺にぐつと近づく。

「や、そうなの？」

「マジかよおい！」

なぜか未来と光の二人も俺を問いつぶめるように近づく。

かなりの圧迫感

「い、いや、とくにいねえよ

「や、そうですか」「や、もう」「もうか」「

三人は同時に深い息を吐く。

「なんでそこそそんな安心したみたいなリアクションなんだ？」

俺が訊くと三人が背後にギクッという文字が出るようなリアクションをする。

「い、いや、これは、その　」

「べ、別にそんなことないわ。気のせいじゃない？」

「やうひか　？」

「そ、そりやうす、やうやすよ」

萌と光が首をぶんぶん振る。

「まあ、それならいいけど　」

なんか、触れてほしくないみたいだし。

それに、今はそれより先に考えなきゃいけない」とがあるし。

「というかそもそも、お前の好きなタイプってどんな奴なんだ？」

「好きなタイプ　？　一緒にいて楽しくて飽きなくて、俺が自然体でいれるような奴かな？」

「容姿　？　全然気にしないけど。」

「はあ？　なんで？」

「なんでって　一緒に生活していくなら容姿よりも性格良いほうが絶対良いだろ。まあそういう意味では、お前らが一番好きなのかも　一緒にいて楽しいし、飽きないし、自然体で入れるし　」

俺がそう言つと、三人は同時に赤面する。

「ななな何言つてんだお前！… 馬鹿じやねえの！？」

「あんたって人は 」

「そそそ、そんなことさせなり言われても 」

「いや、だつて本当のことだし もしかして、迷惑か？」

俺が訊くと三人はクビがちぎれんばかりの勢いで首を横に振る。

「嫌、迷惑だなんて全然！… 「れっぽちもー」

「そつか、良かつた 」

「こいつらに嫌われてたら俺はかなり鈍いってことになつちまつから
な。

（す、好きつて言われちゃつたです ）

（萌！ ニヤニヤしないの！）

（そういう未来も、気持ち悪いへりへり「やついてるつて 僕もだ
けど）

（しょ、しょうがないじゃない、す 好きつて、言われちゃつた
んだから）

「おい、どうかしたのか、三人とも変な顔して 」

俺が訊くと三人は一斉にほつとした表情になる。

「い、いや、別になんでもないわよ。」

「やう？ ならいいけど」

「で、結局どうするんだ？」

光が話を変える。

「結局って 告白のこと？ つーん まだ決めかねてるってトコかな 別に告白する相手もいないし とりあえず誰でもいいからつてのは嫌だしな」

「じゃ、じゃあ、私達の中から選ぶつてことですか？」

「ん、ああ、今のところまだそういうことになるか」

俺がそうこうと光がぐつと俺に近づく。

「なら誰を選ぶ？」

「はい？」

「この三人の中なら、誰がいい？」

光がマジな顔で訊いてくる。

「誰つて」

「

俺が未来と萌に助けを求めようと視線を移すと、二人ともマジな顔をしていた。

「アレ　　未来　　萌　　」

「誰なの？」　「誰です？」

二人がハモると俺にぐつと近づく。

三人の顔が目前に（萌はかなり頑張って伸ばしても俺を見上げているが）迫る。

「えっと　　三人とも好きだけど」

「そういうのはダメ。絶対誰か選びなさい」

未来が少し赤面したまま冷静に告げる。

そう言われても　　誰を選んでもいい結果にならないのは目に見える。

三人とも徐々に俺を追い詰めていく。

「えっと　　その　　一人なんて決められないって」

「どうしてですか？　私達のこと　　その　　す好きなんですよね？」

「まあ、それだけでも三人それぞれにいいところがあつて
一人には決められないって」

俺がそういうと三人は顔を真つ赤にして俯く。

今のはじこ

「つて、逃げるなー」

光が逃げようとした俺の腰を掴む。

すると未来と萌も俺にしがみつく。

勢いよく床に倒れこむ。

「ぐ、離せ！」

「あらんと私達の良」と「」を言つまでも離れない

未来が真剣な表情で言ひ。

「はあ？」

「わやつわやと言つちまへ

光がニヤニヤ笑いながら言ひ。

「いや、なんですよ」

「わつを言つてたのは嘘だつたですか

？」

萌がとびきり悲しそうな顔をする。

「い、いや違うんだ」

「だったら」

三人がぐっと俺の顔に近づく。

「せつせと聞え」「わつせと聞こなれ」「せつせと聞ひとへださ
い」

逃げれそうもない。

第三話 敦君の家庭の事情

「ただいま」

疲労困憊で帰つて来ると、中からウチで住み込み家政婦として働いてくれている七富絵里ななみやえりさんが出て来る。

元々はどこかの大きな会社の社長令嬢だつたらしいのだけど、不景氣の波をモロに受け会社が倒産寸前迷までいつた時にジジイがその会社を買収し、七富一家は救われたらしい（買収された後はよく分からぬが）。

救つたお返しなのか、結婚して辞めてしまつた家政婦さんの代わりに絵里さんが来てくれた。

容姿はかなり綺麗で、元社長令嬢なだけあって、白い肌、艶のある長い黒髪、切れ長の瞳、それにすつと通つた鼻筋は上品な雰囲気を醸し出している。

なんとなく和服が似合つ「そうだけ」「胸がきついんです」と言って未来に睨まれてた。

「お帰りなさいませ、敦さん」

七富さんはいつも通り柔らかな笑顔で迎えてくれる。

この笑顔を見るだけでかなり癒される。

「だから敬語は止してくれって

」

「そういうわけにはいきません。敦さんは私の雇い主でありますし

」

「雇い主命令とかダメなの?」

「ダメです。」)飯出来ますよ

絵里さんはそのままリビングに戻る。

俺も靴を脱いでリビングに入ると、美味しい匂いが鼻の奥をくすぐる。

「ビーフシチュー?」

「はい、リクエスト通りです」

そういえば出かける前に言つてたつけ?

俺が椅子に座ると皿に大盛のビーフシチューが出て来る。

「沢山食べて下さーね」

「いや、これ多過ぎ」

「何処にお出かけしてたんですか?」

相変わらずマイペースな人だ

「ん、ちょっと相談しに光の家にね」

「相談 ですか？」

俺はジジイとの約束を話す。

「ひつうわけで、恋人探さなきゃなんだけど 」

「こ、恋人ですか 」

「絵里さん、恋人になってくれる?」

僕が訊くと、絵里さんは一瞬で顔を真っ赤にする。

「へっ！ あ、い、いや、わ私は、その 」

「あはは、冗談だよ」

絵里さんはウブでこいつ「冗談を言ひとすくに慌てるからからかいがいがある。

「じょ、冗談ですか 」

絵里さんは安堵と落胆が入り交じったような表情になる。

「しつかし、どうしたもんかなあ、恋人なんかすぐ出来ないし

」

「誰かに恋人のフリをしていただくのは如何でしょうか？ そ、そ
の、なんでしたら私でも 」

「

「無理無理、あのジジイにそんないとしたら本氣にして法律変えてでも今すぐ結婚させよっとするだら」

困つた」と、ジジイにはそのへりこの法律なら簡単に変えられる
ちから
権力がある。

「ですけど 今、敦さんに好きな人は、いないんですね？」

「んー、まあね」

といふか、誰かを異性として好きになつたことは人生で一度もない。

「だったら、そんなに焦らなくとも じっくりと探していくばい
いと思いますけど 昭一様も、すぐに会わせるとはおっしゃられ
てはいなんですね？」

「ま、そりなんだけどね 」

だけど、早いとこジジイを安心させてやりたい。

一応、あれでもまだ一人も付き合つたことのない俺の将来を心配を
しているのだろう。

「ところで、敦さんは、どんなタイプの女性が好みなんですか？」

「肌が白くて長い黒髪で鼻筋がすっと通つた胸が大きい人」

俺が迷わずすらすら答えると、絵里さんは一瞬で顔が赤くして慌て
だす。

「え、ああの、そそれって」

「冗談だよ。俺あんまり外見の好みないし」

「あうー あんまりびっくりさせないでください」 「

絵里さんがまた安堵と落胆が入り交じったような表情になる。

「だつて、絵里さんすぐに慌てるし、いつも表情変わるんから」

「敦さん 意地悪です」 「

絵里さんはいじけた声でふくつと頬を膨らませる。

絵里さんはいつこう子供っぽい所もある。

まあ、可愛いからいいけど。

「ほら、そんな顔してるとせつかくの美人が台なしだよ」

「どうせそれも冗談」

「冗談じゃないよ、これは」

それは本当だつた。

といふか、絵里さんを美人ではないと言つ人間はいないんじゃなか
るつか。

「ほ、本当 ですか？」

「当たり前でしょ」

俺がそつまつと、絵里さんは照れと喜びが混じった表情になる。

「や、そつですか！？」

「ヒーロー、絵里さんの男性の好みってどんなの？」

「わ、私ですか！？」

「うん、ちょっと興味ある　ってか、好きな人いなの？」

「そ、それは　」

絵里さんはこちらを向いて顔を赤くする。

「その　秘密です」

秘密ってことは　いるんだ。

「男性の好みも？」

「秘密　です」

「そつか」

まあ、好きなタイプって結構恥ずかしいしプライベートなことだからなあ

「そ、それより、お代わりはいかがですか？」

「いや、まだ全部食べてないし」

絵里さんはなぜか慌てたように話を変える。

どうしたんださう?

第四話 敷君の毎朝の口論

「朝だよ、起きろ」

「ん~、後5分」「

俺の朝は、まず寝てこる絵里さんを起さなければ始まる。普通家政婦さんが先に起きるもんだと思つたが、絵里さんが俺より先に起きたことは今のことひ一度もない。

「せ、せ、わあと起きるー。」

俺がそう言しながら布団を引っぺがすと、パジャマ姿の絵里さんはぐっぐと起き上がる。

「おふあよおじまます~

「はい、顔洗つて来て

「ふあ~い」「

絵里さんがふりふりと洗面所に向かつ。

この間に朝食を作る 時もあるけど今日の朝食は絵里さんが昨日大量に作ったビーフシチューだ。

絵里さんの分と自分の分を皿に入れ、一つずつ電子レンジに入れる。

レンジが仕事を終えた頃には絵里さんがうつだれた顔でリビングに来る。

「敦さん　こつもすこません　」

「いいよ、別に。朝以外は全部世話をしてもらってるし、これくらいしないとね　って言つても、今日は朝起こすだけしかやってないけど」

僕がそつまつしても絵里さんの顔は晴れない。

「ですが　本当は私がやらなことじゃないことなの」

「じゃあ、や。晩御飯美味しい物作つてよ。こつも楽しみにしてる
かいそい、絵里さんの料理」

励ますために俺がそつまつとい、そつまつへ絵里さんの表情が明るくなる。

「は、はい、分かりました！」

「じゃ、食べよつか

「はーー。」

そして手をひく食べ始める。

カレーは一晩おくと上手にこじこじかど、ピーフシチューは当て嵌まらないよつで、昨日よつおこしくはなかつた。

食事を終えると急いで身支度を整える。

と言つても、制服を着て寝癖がないか確認するだけだけど。

「 よし」

身嗜みを整え、鞄を持って玄関に行く。

「じゃあ、行つてくるからー！」

「はい、気をつけて下さこね」

リビングから絵里さんが返事する。

外に出ると光が一人で門の外で待つていた。

「おはよう、光」

「ああ、おはよう。はい、これ今日の弁当」

光はいつも俺の分の弁当も作ってくれている。

なぜか自分が作っているとバレるのが嫌らしく、二人きりの時しか渡さない。

「いつもありがとな」

「いいつて、別にたいした」とじゃないし

「未来と萌は？」

「ああ、まだ起きてないって。小畠さんが言つた」

未来も萌も朝に弱い。

見た目も性格も殆ど似てないのこ、こいつは似てるんだよな

「じゃ、迎えに行きますか」

「ああ、抜け駆けするとあとからすりつけ怒るし」

「抜け駆け？」

「あ、いや、何でもねえよ！ ほら、行こうぜ！」

光は俺の背中をバシバシ叩くと走りだした。

「こつもすみませんです」

萌が申し訳なさそうに頭を下げる。

なんか萌と絵里をそつて性格似てる

「いこつていこつて、別にたいしたことしてゐわけじゃないし、萌
は気にしなくていいって」

「それは、私は気にしない」とへ。

未来が光を睨む。

「やつやあやうだら。お前起こすのどれだけ苦労してるか」

「しょ、しょうがないでしょ、朝は弱いんだから」

未来は顔を赤らめて俯きながら呟く。

未来を起こすのは光の役目で、俺は中には入れてもうえない。

なんでも「100年の恋も冷めるような姿」らしい。

どんな姿なんだろ

「今度は敦に起こしてもうか」

「だ、ダメに決まってるでしょ……」

未来が珍しく大きな声を出す。

「じゃあきちんと毎朝起きる」とだな

光が悪役のような笑みを浮かべる。

未来は一瞬悔しそうな表情を浮かべたが、すぐに元の表情に戻る。

「じゃあ、光も毎日ちゃんと一人で宿題やらなきゃいけなくな るわね」

「な、何でだよ…？」

「だつて毎日起こしてあげる代わりに毎日勉強教えてあげてるんじやない。ま、そなつたらあなたの成績どうなるか見物だけど」

未来が意地の悪そうな笑みを浮かべる。

「別に勉強くらいい俺が教えてやるけど?」

「へ? い、いや、いってそんな」

「ま、あんな解答見せられないわよね」

未来がクスッと笑う。

「 そんな酷いです?」

「そりゃあ酷いわよ。珍解答のオンパレード」

「み、未来!」

光が慌てて未来の口を塞ぐ。

「あ、きちんと明日からも起こしてやるからさー。」

「別に馬鹿でも気にしないけど 知ってるし」

「ば、馬鹿とか言つたな!! ちょっと考え方があつて記憶力がないだけだ!」

「そ、そつか」

それを馬鹿といつもじや と思つたけど黙つておく。

「つてか、そろそろ 」

未来を離してやつた方がいいんじゃないかな? と言つ前に、光がバツと手を離す。

「こ、ここつ人の指舐めやがつた!」

「あんたが私の口と鼻一緒に塞ぐからでしょ!」の馬鹿!..

いつも通り、未来と光の言い争いが始まる。

萌は曖昧な表情を浮かべ、ヒートアップする言い争いを見ている。

本当にやばくなつたら止める気だわ!。

こいつって馬鹿みたいなことをしながら、楽しく毎日を過いでいる。

でも、もし誰かと付き合つことになつたり こいつって三人と馬鹿やれることはなくなるんだわ!。

それは 嫌だ。

だからジジイには悪いけど もう少しだけ、今までいたい。

三人と、少しでも早く 楽しんでいたい。

そう思つた。

第五話 敦君と学校での出来事

学校に着くと、学年の違つ萌乃は自分のクラスメート達の輪に加わり、俺達は三人で自分達のクラスに行く。

教室に着くと、隣の席に座る奴から話しが掛けられる。

「よ、今日も女連れて出勤かい？」

かざまきじゅんぺい
風巻順平、俺の親友で女好きな男だ。

かなりの美男子で、お洒落で性格もまあまあ良いが、不思議と誰かと交際したという話は聞かない。

やつぱり馬鹿でかなりの女好きという所がマイナスなのか

「なんか失礼なこと考えてないかい？」

「いや、別に」

「で、どうなのよ？」

「何が？」

俺がそう答えると順平は微妙な表情になる。

（お前の交際相手、誰を選ぶんだよ？）

俺が訊くと順平は俺の耳元に近付き、小声で告げた。

「ふつ……」

おもこいつをつぶさだしちまつた。

(何で知つてんだよー!?)

(お前の爺ちゃんが言つてたぞ、もつすぐ孫が結婚するつて)

誰がするか。

といつか、本氣で法律変える氣があのジジイ。

(どうせお前にことだから光か未来が萌ちゃんだろ? あ、七宮さんもいるか。誰にすんの? より取り見取りじやん?)

(お前なあ そんな簡単に決まるわけないだろ? 大体なんでその四人が候補なんだよ)

(だつてこつも一緒にこるじやん)

(そりゃあ、幼なじみに家政婦だからな)

(いや、七宮さんはともかく、他三人はいくらなんでも一緒にいしきだろ。登下校も一緒にし、休日も殆ど一緒にだ? 普通ありえねえって)

順平はそつと俺を睨む。

(なんか、言つててムカついて来た お前何であんなにモテてる

んだよー。)

(別にモテてるわけじゃないけど)

(じゅあ、どうして毎日毎日あんな美人のメイドに世話をしてもうらつて、あんな綺麗で可愛い幼なじみと毎日こちやいちゃしてるとだよー!?)

(家政婦で幼なじみだからだよー! いやこけやしてねえしメイドって言つたなー。)

「なーに一人でしゃしゃ話してんの?」

後ろから光が俺達の首に手を回してくれる。

気付いてんのか気付いてないのかは知らないけど、胸があたつてる。

「いや、別に何も 」

「本当にかわいいのか? 私の名前が出てた気がするんだけど」

小声で話したのに、どんな耳してるんだコイツ

「光、ここつと結婚しないの?」

順平が俺を指差しながら光に訊く。

いきなり何訊いてんだこいつ?

「はあー? お前何言つてんのー? 馬鹿じゃねえ?」

光は意味分からぬといつた表情になる。

当たり前だ。

ただ声が大きすぎです、皆が一斉にこっちを見てますよ。

「いや、だつてこいつ結婚あい」

「言つんじゃねえ馬鹿！」

こんなところで言つたらどうなるか

「で、何が言いたいんだよ」

光が順平を睨みつける。

「いや、だつてお前こいつ好きだろ？　だからぶふう！」

順平が光に殴り飛ばされる。

「何馬鹿な」と言つてんだ馬鹿！　殴り飛ばすぞ馬鹿！？」

光サン、もうしつかり殴り飛ばしますが。

「馬鹿馬鹿言つた馬鹿！　馬鹿つて言つた方が馬鹿なんだバーカ！」

子供か

「　何一人して騒いでいるのかしら？」

未来が相変わらずの無表情で俺達の方を（と）見つめつつ光と順平の方を（と）見ながら言ひ。

「「だつてこいつがー。」」

順平と光がお互に指差しながらハモリ、お互に睨み合ひ。

実は似た者同士なんじゃないかこいつら ？

「まあ何でもいいけど、あんまり馬鹿騒ぎしないでね、迷惑だから」

未来は僅かに呆れたような表情を見せると自分の席に戻っていく。

「お前のせいでお前がいきな」

「はあ！？ お前がいきなり」

「ほり、一人とも静かにしなよ、また怒られるよ」

ホント、懲りない奴らだ

「とにかく！ こいつとはなんにもないし、なんとも思っていないからー。」

光が順平に詰め寄ると、俺が指差しながら強口調で言ひ。

そこまで言わなくてもいいのに

だけど、これはこつものことだ。

昔からいつも一緒にいすぎてこいつ言わることは何度もあったが、そのたびに光も未来も萌もすぐに否定して来た。

「あ、そり

順平は意外と冷めた目で光を見る。

「何だよ、何か言いたいことがあるなら言へよ」

「別に」

順平が言葉を繋げようとした時、教室の扉が開き、担任の銅實咲先生あかがねみさきが入って来る。

いつも通り女子高生に間違われる童顔にナチュラルメイクを施し、スーツを身につけてはいるが、その上から白い薄手のジャンバーを羽織るといつややラフな格好で現れた。

「それじゃ、朝のホームルームを始める その前に

銅先生が俺の方を見る。

嫌な予感がする

「音羽、お前、嫁探してるって本当か？」

最悪だ。

第六話 敦君と先生の関係

「音羽君、もう結婚相手探してるの？」

「やつぱりお金持ちは違つんだね」

銅先生の不用意な一言によつて、あつとうに俺の尊は広まり、俺は休み時間の間ずっと女子達に囲まれてしまつた。

「あーいや、別にそういうわけじゃなくて、勝手にジジイが言つてるだけだから」

「えーでも、お祖父さんは本氣で探してるんでしょ？」

俺が弁解しても、あまり効果がない。

「まあ、そうかもしないけど 今のところ俺は全然考えてないし」

なるべくならこのままの関係性が良ことさえ思つてゐる。

「そういうえば、恋人とかもいないしね」

「付き合つたりしないの？」

「今のところは 考えてないかな。告白されたら考えるかも」

「へえ、じゃあ私もいいの？」

「うん、考えとく

「あちやあ、ダメかあ」

みんなで話をしていると、後ろから誰かに肩を叩かれる。

「敦、先生が呼んでる」

振り向くと、やや不機嫌そうな表情をした未来が立っていた。

「先生が　？　何の用事？」

「私に訊かれても分からぬわよ」

「ま、そうだね　先生は教務室？」

俺が訊くと、未来は首を横に振る。

「社会科準備室つて言つてたわよ」

未来はそう言つて踵を返しつつかと歩き出す。

「お、おー、ちょっと待てよー。」

俺が未来の肩を掴んで止めると、いつも無表情な未来にしては珍しく明らかに不機嫌そうな表情をしながらこちらを向いた。

「何か用事？　まさか社会科準備室がどこにあるか分からなんて言わないわよね」

「いや、やつじやなくて　お前何でそんなに怒つてんだ？」

俺が訊くとさうに不機嫌そうな表情になる。

「　別に怒つてないわよ、馬鹿」

未来はそう言いつとせつときより不機嫌そうな顔をして立ち去つて行く。

バツチリ怒つてゐるけど　?

未来の謎の怒りを解決出来ないまま、俺は社会科準備室の前に来た。

扉をノックすると、銅先生の「入つて」という声が聞こえる。

「失礼します　」

中には銅先生が一人で椅子に座つて俺を待つていた。

「遅いぞ、敦。ボクが呼んだら競歩で來い」

銅先生が「冗談なのか本気なのかわからぬ表情で言つ。

「それで何の用ですか?」

「まず一つ田は謝罪だ　朝はすまなかつたな。あそこまで話が広がるとは思わなかつた」

銅先生はそう言いながら頭を下げる。

「別にいいですよ。騒がれるのには慣れますから」

「それもどうかも思つたんだな」

銅先生は苦笑いしながら椅子から降りる。

「で、もう一つは　その、結婚　のことなんだが　どうなんだ？　相手は見つかったのか？」

「見つかってませんよ　恋人もいないのに見つかるわけないじゃ
ないですか」

俺がそう答えると、銅先生は嬉しそうとも悲しそうともとれるよう
な、複雑な表情をした。

「え？　お前モテるし、恋人の一人くらこはいそつだけどな

「普通　教師つてそつゆつ事奨励しないんじゃないんですか？」

「別に不純じやなきや構わないだろ？　お前は真面目だし
座らないのか？　いつまでも立つてると疲れるだろ？」

銅先生はそう言つて、自分も応接用の椅子に座る。

「用、終わつたんじやないんですか？」

「用がないところにいるのかお前は」

そりやあ好き好んでこんなところに来る人はいないと思つた

「ボクが人を呼ぶなんて滅多にないことなんだぞ？」

「そりゃあ呼ばなくとも誰かここにいますからね」

銅先生は男女問わず生徒からかなり慕われていて、この部屋は普段なら生徒が何人かいる。

「そういう意味じゃなくてな」

銅先生が苦虫を潰したような表情をする。

「全く、相変わらずの鈍感ぶりだな」

「鈍感？」

俺が訊き直すと、銅先生は俺の目の前まで歩いて来る。

「お前に好意を持つている奴なら色々な所にいるってことだ。まあ隠してる奴もいるけどな」

銅先生は俺の方にぐつと近づく。

「教師がそんなことしていいんですか」

「今何時だ？」

銅が急にそんなことを訊く。

「5時　4分ですけど」

「だらうひへ、だつたらもう教師の時間は終わりだ」

「そんなこと言つてるから教頭先生に怒られるんですよ、先生」

「先生　？」

”銅先生”は不満げな表情をする。

俺は溜め息をつき、言い直す。

「みー姉」

「よひしー」

”みー姉”はそう言って満足げに笑い、俺の頭を撫でた。

実は銅先生とは、小さい時家が近所だったこともあって、昔からの知り合いだ。

昔からこんな冗談をしては俺をからかっていた。

”みー姉”はこの学校にくる前　教師と生徒の関係になる前の呼び名だ。

と言つても、普段この呼び方をするのは、光くらいいだけど。

「で、お前の懸念については大丈夫だ。教頭は今日は一田出張」

「そういう問題じゃないんですけど」

「

「なんだ、まだ何か問題があるのか？」

「『』の状況見られたらお互にマズイでしょう。冗談でも『』はダメですよ」

「冗談か」

銅先生は何故か不満そうな表情をする。

「どうかしたんですか？」

「お前 相変わらず他人の好意を踏みにじってるな」

『』甘い言葉は耳半分で受け止め、つい言つたのはみー姉です

俺がそう返すと、銅先生は苦々しい表情を浮かべ、俺から離れ、僕の横に座る。

「そんなこと、分かつてる」

「だったら踏みにじるなんて言ひ方しないでトセー」

「ああ、すまない」

銅先生は素直に謝ってくれた。

「それじゃあ、俺もう行きますね」

俺がそう言しながら立ち上ると、銅先生は俺の制服の裾を掴む。

「何ですか？」

「大事な事言うのを忘れていた。恋人の話だけ、別にお前好きな人もいないんだから、今すぐ作ろうなんて、焦る必要はないからな。まずは純粋な好意かどうか見極める目を身につける」

「分かりました」

「それじゃあ、行つていいぞ」

銅先生はそう言つて裾を離す。

「それじゃ、また明日」

「ああ、また明日」

俺が言つと、銅先生は微笑んでひかえめに手を振つた。

第七話 敦君と一人きりの下校（前書き）

書いてありませんでしたが、この物語は今6月です。
みんな夏服です。

第七話 敦君と一人きつの下校

「あ、敦さん、今帰るですか？」

社会科準備室から出ると、萌とばったり出合った。

「ああ、用事も終わったからな　　萌は、何でこんな所にいたんだ？」

俺が何の気無しに訊くと、萌は何故か顔を真っ赤にして俯く。

(　お姉ちゃんが　　「ここにいるって言ったから　　)

萌はぼそぼそと何かを言つたけど、俺には何を言つてるか聞こえない。

「萌？　どうかしたか？」

「えー？　いいえ、なな何でもないです！」

萌はあわてふためきながら手と顔をぶんぶん振る。

なんかよく分からぬけど　　まあ、本人がそつまつなう、あまり深くつづけられない方がいいな。

「未来と光は？」

「委員会と部活です」

未来は図書委員、光は調理部に入っている。

運動が嫌いで、本が好きな未来が図書委員は納得だけど、運動が大の得意で体育ではどんな種目でも主役になる光が文科系の部活に入つてるのは未だに謎だ。

まあ、そのおかげで美味しい弁当が食えるわけだけど。

「萌も用事ないんだろ?」

「あ、はい。もう後は帰るだけです」

「じゃ、一緒に帰るか」

「え　は、はいです！」

萌が顔をパッと輝かせて返事をする。

そこまで喜んでくれると誘つたかいがある。

「じゃあ、準備してくるから玄関で待つてくれるか?」

「はいです!」

萌は満面の笑みで駆けていく。

廊下は走つたら危ないけど　そんなことを言つ暇もなく去つて行つた。

相変わらず足速いな

俺も急いで準備しないとな。

超特急で準備して玄関に向かうと、萌がもじもじしながら立っていた。

「待たせて悪いな」

「い、いえ、全然大丈夫です！」

萌はこっちを満面の笑みで見る。

「じゃ、行くか　どつか寄りたいと」「ある？」

「え？」

「いや、どうせならどこか寄つていこうかなって思つて。せっかく
一人きりだしな」

「ふ、一人きり　」

萌はなぜか真っ赤な顔でその言葉だけを繰り返す。

「あ、やっぱ嫌か？　それなら一人を待つてた方が　」

「い、いえ、全然そんなことは…　というか望んでたくらいで！」

「望んでた？」

「あ、いいえそれはその言葉のナントカって奴で
にしないでトモコですー。」

「あ、ああ 分かった」

いつもおつとりしてる萌がものすごい勢いで詰め寄つて来て、つい
頷いてしまった。

「じゃ、じゃあ行くですー。」

萌はそのまま外に出ようとする。

「お、おーー 靴!」

内履きのまま。

とつあえず俺達はパーティに移動した。

「どうする?..」

「わ、私はどうでもー。」

萌はやつきかりくな調子だ。

顔も結構赤いし、どうも様子がおかしい。

「なあ、萌」

「は、はい！」

「どうか体の調子悪いのか？ なんか顔も赤いし」

俺の質問に萌は首をぶんぶん振つて否定する。

「そ、そんなことないです！！ 全然全くいたつて健康体ですよー！」

「な、ならいいけど」

やつぱりどいか様子が変な気がする。

だけど、萌にはそれを言つことを憚られるような迫力があった。

「あ、敦さんは行きたい所とかないんですか？」

「俺？ 僕も別に」

そもそも、光に弁当を渡すために時間を潰そうと思つて来ただけだし。

しかし一人とも行きたい所がないとは 正直困った。

やつぱり、「ううう時は誘つた俺が責任持つて決めるべきだよな

「じゃあ とりあえず何か食べるか」

「え？」

「いや、腹減ったから 暑いしアイスでも食べよつかと

「アイスですか」

「アイスですか」

萌は少し困ったような表情になる。

「あれ、嫌いだっけ?」

「い、いえ、そういうわけじゃないんですけど

「じゃ、行くわ。確かこの近くにあったはず

ちゅつと探すとアイス専門店が見つかった。

「こりゃしゃいます! 何にいたしますか?」

店員が営業スマイルを浮かべながら注目する。

「何がいい?」

俺がメニューを見ていた萌に訊くと、

「えっと ストロベリーで

「じゃあ、チヨコレーとストロベリーで

「かしこまりました!」

店員がこなれた手つきですぐにアイスを用意する。

「300円になります。」

萌が財布を取り出す前に、俺が料金を払いアイスを受け取る。

「え、あ、あのー」

「奢るよ」

「そんな、悪いですー。」

「いや、誘ったのは俺だし」

「あつがどうぞしましたー。」

店員が「いいで言こ争うな」と言つたげにお決まりのフレーズを使うと、萌は引き下がつた。

「す、すいませんですー。」

「だからこいつて。ってか、あれだけそんち謝られると逆に重いつてー」

俺がそう答えたながらアイスを手渡すとすると、萌はひとつもなくショックを受けた顔になる。

文字で表現するなら、ガーン×3くらい。

「『めんどくさい』過ぎた」

「いえ 大丈夫です」

萌が全く大丈夫じゃなさそうな感じで答える、俺から何故か目の前にあるストロベリーアイスではなく、バニラアイスの方を取る。

「あ、おー」

俺が声をかけた時には萌はバニラアイスを口に含んでいた。

味の違いに気がつかないのか、萌はすぐにまた一口田を開いて口に含み始めた。

「萌、それ俺のなんだけど」

萌はそれでようやく気付いたらしく、ハッとして、田を開黒させる。

「あ、ああの、『めんなさい』です！」

萌はそうして俺にアイスを渡す。

「大丈夫だつてこのくらい」

「で、でも」

萌は昔から気にしそぎな所がある。

まあ、それが長所でもあるんだけど

なるべくさつきみたいに萌を傷つけないように、この場を和ます方法は

「じゃあ 萌の分も一口もいりつけないで」

俺は冗談めかした口調でさつらつて萌が食べた分と同じくらいの量を食べる。

「あつ 」

萌の口から漏れたよつて葉が発せられる。

「ほひ、これでおあこひして」と

そつ言つて俺がアイスを渡すと、萌は真つ赤になつた顔を隠すよつに受け取る。

「どうかしたのか?」

「な、何でもないですよー。」

萌はそつ言つながら、じつとアイスを見つめる。

「早く食べなこと溶けるわ

「わ、分かつてるです 」

萌はそつ答えると、じばりく回じよつしてから、決心が出来たかのようにパクパクと食べる。

なんでこんな急いで食べてるんだひ。

俺はマイペースにアイスを食べる。

当然のことながら、萌の方が早く食べ終わる。

「いいわいわまでした」

萌が礼儀正しく手を合わせる。

その時、萌の口元にアイスがついているのに気付いた。

「萌、アイスついてる」

「えー？ ビ、ビ！ です？」

「口元 ああいや、そつこじやなくて ちょっとじつとじつて
「」

なかなか取れない萌にじれったくなつて、俺が指でさつと拭いて、
アイスのついた指を舐める。

あんまり行儀よくないにけり、まあ、もつたといないし。

「あつ 」「あつ

また萌の口から言葉が漏れる。

「あつ、あつ、ああ 」「あつ

萌は壊れた口ボットみたいにぎりぎりなく動きながら、回じよつな言葉を繰り返す。

「萌？　どうかしたのか？」

「か、間接」

俺が聞き取れたのはそこまでだった。
萌は顔を真っ赤にしてふりふとよろめいたかと思つと、そのまま気絶してしまった。

第八話、敦君とトラブル（前書き）

昨日のサマーワーズと今朝のなでしこ見ながら書いていたので読み直したら誤字がたくさんありました

第八話、敦君とトーラブル

「う ん 」

萌の口から苦しそうな声が漏れる。

俺は氣絶してしまった萌を抱き抱え、ベンチに横に寝させた。

すぐに起きるかと思つて”この体勢”にしたんだけども　　5分以上経つても、起きる気配がない。

もしかして本格的にヤバいんぢやないか　　なんて思いながら顔を覗き込むと、萌はようやく目を開きました。

「萌、大丈夫か！？」

「あ、あれ　？」

萌は未だに寝ぼけているよつよぼーっとしている。

数秒、お互に沈黙したまま見つめ合つ。

「 」

そして、ようやく状況が理解出来たのか、顔を真っ赤にする。

「あ、あ、あああの、す、すいませんですー。」

萌ががばっと起き上がる。

そつすれば萌の顔を覗き込んでいた俺の顔に当然ぶつかる。

「痛ー！」

「！」、「めんなさー」ですっー。」

萌は謝りながらも額を押さえてまた俺の膝の上に横になる。

「あ、あれ？」

萌は自分が枕にしてくる、俺の足に触る。

「え、え、えええ！」

萌が未だかつてないほど大声量で叫んでまた跳ね起きる。

「な、なんで　ひ、膝枕　」

萌の顔はこれ以上ないくらい真っ赤になっていた。

例えるならトマトとか。

「いや、いきなりぶつ倒れたから、とりあえず休ませようかとベンチ探して　で、そのまま頭をベンチにのせるのもアレかと思つて膝枕　せっぱマズかったか？」

「いいいいいえ、全然そんなことは！ むしろ嬉しいくらいで！」

「そ、そつか、なら良かつた」

萌の普段は見せない迫力に気圧される。

今日の萌はどこか変だ。

これはやっぱり

「ごめんな、萌」

「え？」

萌は何で謝られたのかわかりません、とこりみづな顔をする。

「体調悪いのに、付き合わせちゃって」「

「た、体調は大丈夫ですよ！」

「だけど、今日の萌は変だ。なんかぼーっとしてるし、ずっと顔赤いし、よく叫ぶし、それに 事実ぶつ倒れてるし

「」「これは ひ、貧血ですよ！ その、今ダイエット中なんですよ！」

「ダイエット ？」

萌の体を見る。

確かに”脂肪”はあるけど

「 敷さん、目がいやらしくです」

萌に睨まれてしまった。

「いや、でも痩せるべきところは痩せてると悪いナビ
とかあんまり良くないしな」

俺がそつと萌は俺から顔を逸らす。

「 萌」

「ぬ、抜いてませんです！ 別に朝食抜いてませんですよー。」

相変わらず嘘が下手だな

つてか、だから貧血になつたんじゃないかな？

「力士と真逆のことすこしや痩せるんじゃないかな？」

「え？」

「摂取する量を増やすぞ！」五食くらいに分けて、食べた後に運動したら痩せるつて

俺がそつと、萌は少し考えてから俺を見る。

「あ、敷さんは 痩せてる人の方が好きですか？」

「俺？」

何で俺の好みを　？

「まあ、どっちでもいいけど　ウエスト60切つてたり、あんまり太すぎたりするのはちょっとな　健康的な方が好きだし」

「ほ、本当ですか！」

萌がぱつと顔を輝かせる。

「あ、ああ　」

萌は一人の世界に入つてぶつぶつ呟いてる。

「あ～、萌？」

呼びかけても返事がない。

とりあえず萌を膝から起こして立ち上がる。

冷たい物とか当てたら元に戻るかな

「飲み物買って来るから」

おそらく聞いていない萌にとりあえず伝え、近くの自販機に飲み物を買いに行く。

適当に飲み物を買って戻ると、なぜか萌は不良っぽい男一人に絡ま

れていった。

一分くらいしか経つてないのに

まあ、このままじゃ危ないだろ？し、助けないとな。

「なんかあつたのか？」

「あ、敦さん」

「あ？ なんだテメ！」

男の片割れが俺に詰め寄る。

「『じめん近寄らないで口臭い』

「ふざけてんのかテメ！」

俺が素直に感想を述べると男が殴りかかって来る。

男の拳が俺の顔面に当たる。

「あ、敦さん、だ、大丈夫ですか！？」

萌が焦つた様子で俺の傍に来る。

「だからあ、こんな男ほつといて俺達と来いつて

俺を殴つた方じやない男が萌に話しかけながら萌の手を取る。

「さうせんぱされてもよつた。

まあ、萌は普通に可愛いしな

「ですからー 私はいかないって 」

「大丈夫だつて。ちょーと話をするだけだから」

「そうやつ。こんな奴ほつとこで俺らと行こや」

「さうせんぱがいなくなつてからじつへ言に寄つてこるよつだ。

「ですから 」

萌が俺の顔をちらちら見ながら断り続ける。

男達はしびれを切らしたのか、萌の背中に手を回し、強引に萌を連れて行こうとする。

「あやつー ちよ、ちよつと待つて」

「だーい丈夫だつて。すぐ終わるから」

「そう言つことじやなくて 」

「待てよ、嫌がつてんだろ」

俺が萌の手を掴んでいる方の男の肩を掴むと、男はこつちを睨む。

「ああ、君まだいたんだ」

「そいつは俺のツレだ」

俺がそう言つた時、つまり萌は男の意識が完全にこちらに移つた時、
萌は男の腕を捻る。

萌は見た目によらず結構格闘技が得意だ。

「痛たたたた！」

男は腕を離し、萌はこちらに戻つて来ようとする。

「テメ、このクソあま女あ！」

しかし、もう一人の男が、萌を突き飛ばした。

瞬間、俺の中の何かのスイッチが入る。

自分の中の全てが、黒い何かに塗り潰される。

「敦さん！」

萌の声が聞こえた。

俺の意識が保てたのはそこまでだった。

視界が真っ黒になつていった。

気がつくと、俺は未来と萌の家にいた。

「気がついたのね」

未来の声がした。

見ると、未来だけじゃなく、萌と光もいる。

「あの 大丈夫、ですか？」

萌が心配そうに聞いてくる。

「大丈夫に決まってんだろ。こいつ、一発しか喰らってないんだから」

俺が答える前に光が答えた。

「また ”アレ”が出ちゃったのね」

未来が呆れたとも心配してるともどれるような口調で言つ。

”アレ” 僕の中にいるもう一人の俺。

昔に起きた事故の影響で、俺は軽い二重人格になつた。

といつても、普段は全く出てこない。

出て来るのは、俺の怒りがピークになつた時のみ。

ただ、そのせいなのか、出て来るのはかなり残虐な性格な奴で、結

構相手を痛い目に遭わせてしまつ。

止めるのは未来、萌、光、順平、絵里さん、銅先生の六人だけ。この二重人格のせいで、俺は結構危ない奴と思われ、入学した当初はあんまりクラスに溶け込めなかつた。

ただ、一年という時間と、未来達のフォローのおかげで、なんとか去年のゴールデンウイークまでにはクラスメート達とは普通に遊びに呼ばれるくらいに仲良くなれ、去年の夏休みが終わつた頃には学校全体が俺のことを理解してくれ、普通に接してくれるようになつた。

まあ、たまにびくびくしてゐる人もいるけど。

「みたいだな」

「ちなみに、奴らは順平が片付けてたから、心配いらないって」

光が笑顔で俺に告げる。

「 また巻き込んで『ゴメン』」

「それは萌に言いなさい。この子が止めたんだから。私達は後片付けただけ」

「 そりなのか 『ごめんな、萌

「 そんな、全然大丈夫ですよ！ つていうか、もともと私のせいですし 』」

「何言つてんだ、悪いのはあの男達だろ？」

光が萌の背中をバシバシ叩く。

「い、痛いですよ光さん…」

「それで これからどうするの？ もう少ししたら、お母さん達帰つて来るけど 」

未来が一人を見ないふりしながら俺に訊く。

俺が答える前に、俺の携帯が鳴った。

「ごめん、電話だ」

携帯を開くと、絵里さんからだった。

「誰から？」

「絵里さん もしもし？」

『あ、敦さん！？ 良かった、やっと繋がった さっきからずっと電話したりメールしたりしてるので、全然返つて来ないから』

絵里さんは安堵と心配が入り交じったような声だった。

「ああつと ちょっと立て込んで。それで、どうしたの？」

『あ、それが大変なんです！ とにかく大急ぎで帰つてきて下さい

『！』

今度は焦つたような声。

本当に何か大変なことが起きたらしい。

「ああうん、分かった。すぐ行く」

俺は電話を切り、立ち上がる。

「なんかあつたらしいから、もつ帰らなきゃみたい

俺が未来に言つと、未来は僅かに残念そひにする（多少普通の奴なら見逃すべし）の微弱な変化だけ（ビ）

「やつ　じゃあ、しようがないわね」

「ああ、また今度お邪魔するよ。久々におばさん達に会いたいし

『』

「お母さんに伝えておくわ　じゃ、私はちょっと萌に話があるか

『』

「奇遇だな、未来。俺もだ

未来と光が萌を見る。

萌は冷や汗を流し、逃げ出そうとするが、光に捕まる。

「どうして逃げるのかしら？」

「いや、これはその」

「なんか、やましい」とでもあるのかな?」

未来は笑みを浮かべながら萌に近づく。

未来も光も笑つていて見えるが、目が笑つていない。

「これは ねえ?」

「これは なあ?」

珍しく未来と光の息が合っている。

「あ、あの、その、これは 」

萌が困った表情で俺を見る。

明らかに助けを求めていた。

「 じゃ、やつこいつ」とで

「あ、敦さん!?」

「じゃあね、敦

「また明日」

「ちよ、ちよっと待つて

「

俺は萌達に背を向け逃げ出す。

「ごめん、萌 今の一人は無双状態だ 俺も命は惜しい。」

「さあって どうしてくれよっか」

「何したか、とりあえず体に聞いてみるか」

「ちょ、ちょっと待って きもちはほほー。」

廊下に出ると、萌の嬌声が聞こえた。

第九話 敦君の訪問者

未来達の家から出てから、寄り道せずに、絵里さんの言われた通りに大急ぎで帰つて来た。

玄関の扉を開けると、すぐに異変に気がついた。

靴が一足多い。

普段なら俺が帰つて来た時には、絵里さんの靴だけがあるはずだけど、今は女性物の靴がもう一足ある。

「あ、敦さん！ 何してたんですか？」

奥から絵里さんが出てくる。

かなり慌てているようだ。

「まあ色々と」

また我を失つて暴れたことは黙つておく。

「何があつたの？」

「とにかく大変なんです！」

絵里さんは俺の腕を掴んで引っ張る。

連れてこられたのはリビングだった。

そこには、見覚えのない、綺麗な少女が立っていた。

歳は多分俺と同じくらいで、十人いたら十人が可愛いと答えるような容姿で、ショートの髪がよく似合っている。

「お密さん？」

「それが」

絵里さんがなぜか困惑したような表情になる。

「お久しごりです、敦さん」

見覚えのない少女が、俺の名前を呼ぶ。

「久しごり？」

「覚えていらっしゃいませんか？」

少女は首を傾げる。

そんな些細な仕種すら可愛らしい。

「ああ」と

だけど、正直、全く覚えがない。

「覚えていらっしゃらないんですね」

「え、いや、えっと」

何て答えるか困つていると、少女がクスッと笑つた。

「相変わらずですね、敦さん」

少女はそつ言ひつと、ポケットから写真を取り出し、俺に手渡す。

そこには、小さい時の俺と、幼稚園児くらいの小さな女の子、そして田の前の少女を少し大きくした感じの女性が写っていた。

「これは

「私の思ひ出の……写真です。これが私で、これが私の……母親です」

少女は悲しそうな表情になる。

「えつと…」

俺が声をかけようとする前に、田の前の女性は表情を悲しそうな表情をする前の表情に戻す。

「敦さん、この時からすぐに困つてオロオロしてましたね」

そう言つと、真剣な表情をして頭を下げる。

「私は加瀬部梓。かせべあずさ敦さんの 許嫁です」

あつたりと言い放たれたその言葉に、俺は理解できなかつた。

「　は？」

「許嫁です」

梓さんは同じ言葉を繰り返す。

「　許嫁？」

「はい、そうです 私達が五歳の時に決まったものですから、覚えていらっしゃらなくても当然ですけど」

そう言って梓さんがはにかむ。

可愛いのだが、今の俺にそれを感じる余裕はぶつとんでいた。

「いや、それは　」

「昭一様に確認したところ、事実だそうです」

俺が否定をしようとするとい、絵里さんがさあざまな感情が入り混じつた何とも言えない表情で囁く。

「え　？」

「敷さんもお聞きになりますか？」

絵里さんはさつまつて携帯電話を取り出し、ジジイにかけて俺に渡す。

「ジジイ、ビビリ」とだ

『やうそろかけてくる頃だと思つたぞ』

「人の話を聞けジジイ」

『梓ちやんのことじやろ?』

「ああ、そうだよ」

『ジジイはジジイの手の上で転がされている感じがしてイライラする。』

『婚約者の話は本当じやだ。彼女にそれを証明させる書類を持たせておる。どうしても信じられないということのなら、彼女に見せてもらえばよ』

『ジジイはすでにこととを決めていたらしく、すりすりと葉が出でてくる。』

「何で黙つてた」

『やつちの方が面白こじやろ?』

「ふざけつ……！」

ジジイを怒鳴りつけようとするが、電話がブチッと鳴り音とともに切れた。

「

ようやくジジイが何がしたかったのかが見えてきた。

たぶん、ジジイは最初から恋人を見つけさせる気はなかつたんだろう。

ただ、俺にそういう事を意識させたかつただけ。

その状況で、許嫁をこの家に呼び、そういう関係に持ち込みたい
そんなところだらう。

「あ、敦さん 落ち着いてください」

絵里さんが心配そうな表情をしながら俺に言つ。

「ああ、大丈夫だ」

俺はとりあえずそう答えるながら、もう一度ジジイに電話する。

『なんじゃ、まだ用か?』

俺は思いつきり息を吸い込み、そして、全力で、全ての思いを言葉
に変えて叫んだ。

「つやけんじやねえこのクソジジイ!――!――!――!

電話の向こうではジジイが椅子からひっくり返ったのか、とてつもない音がしたが、それを無視して電話を切る。

「全然落ち着いてないじゃないですか」

絵里さんは呆れ氣味にそう言いながらも、なぜか嬉しそうな表情で

俺を見てくる。

反面、加瀬部さんはかなりビビっていたようだった。

加瀬部さんのこと、すっかり忘れていた

「あの、加瀬部さん？」

「 は、はい ？」

加瀬部さんはすっかり怯えきっているようだった。

「 その 婚約者とか、そういう事情は分かったんですけど
で急に俺の所に？ この写真もかなり昔の物だし 」 何

俺が根本的な質問をすると、加瀬部さんは何故か暗い顔をしながら
俯く。

「それは その 」

「 理由はこちらをお読みになられれば理解出来ると思いますよ

何故か言い淀んでいる加瀬部さんをフォローするように絵里さんが
一枚の紙を出す。

紙の初めの文字を見た瞬間、紙を落としこなった。

「これは、遺言状だ。

「これは

「加瀬部さんの母様が書かれたそいつです」

「えー？」

遺言状がここにあり、それが開封され読める状況にある。

つまりそれは

「私の母が　亡くなつたんです」

俺はようやく、加瀬部さんが時折悲しそうな表情をしていたのか理解出来た。

加瀬部さんがその表情をする時は、加瀬部さんの母親の話が出て来る時だった。

「一人になつて、どうしていいか分からなくつて困つてた時に、昭一さんが助けてくれたんです。全ての手続きはこっちでするから、敦さんと同棲しろって　ですか？」

加瀬部さんはそこまで言つと、頭を深々と下げる。

「あ、あの、加瀬部さん？」

「どうか、私をここにいたさせて下せ。家事とか、私が出来る事なら向でもしますから　私、ここしか居場所がないんです」

その声は、震えていた。

「 」

だから。

彼女のためになるなら。

「 加瀬部さんがいいなら、いくらでも」

いいと思つたんだ。

「 本当ですか！」

加瀬部さんがガバッと頭を上げる。

「ええ。 絵里さんもそれでいいですよね」

「え、ええ 私は敦さんの意見を尊重します」

絵里さんは複雑そうな表情で答える。

「ありがとうございます！」

「でも 僕なんかで本当にいいんですか？ ジジイに頼めば、一人暮らしでも、寮のある学校にだつて 」

「いいんです。だつて 」

加瀬部さんが、俺が今まで見た中で一番の笑顔になつて答える。

俺は知らなかつた。

「敦さんの事、好きですか？」

その笑顔の、真意に。

キャラ設定

音羽敦
おとわつし

パーソナルデータ 身長185センチ、体重71キロ、A型。17歳。

好きな物 スポーツ観戦、酒

嫌いな物 喧嘩、煙草

趣味 音楽鑑賞、カラオケ。

世界的大企業『TOWA』の社長、昭一の孫にて、今現在もつとも社長の座に近い男 なのだが、『TOWA』を継ぐ気は全くない。容姿に優れ頭脳明晰、運動も出来ると好条件そろっているが、本人はとある理由でモテないと想いこんでいる。

両親は敦が生まれてすぐに他界しており、昭一や家政婦らに育てられた。

女性経験はないがわりと知識はある。

ある程度の関係性を持ってば他人をあしらえたり、冗談を言ったりすることが出来るようになるが、基本的に初対面の相手とはまともに喋れないうえに、腹が立つと考えるより先に手が出てしまう悪癖がある。

銅の『甘い言葉は耳半分で受け止める』ということを素直に受け止め、ちなみに酒も煙草も経験あり。

煙草は好きになれなかつたが酒はわりと好きでかなり強い。

椎名未来
しいなみらい

パーソナルデータ 身長178センチ、体重68キロ。A型。17歳。

好きな物 辛い物、苦い物。

嫌いな物 運動、甘い物。

趣味 読書、パズル、ゲーム。

敦の幼馴染の一人。

モデル並の容姿と優れた記憶力、それを生かす知恵がある。

男子から人気も高いが、告白はすべて断っている。

ただし本人は胸が小さいことを気にしている。
とある理由から、髪をかなり長くしている。

椎名萌乃
しいなもえの

パーソナルデータ 身長147センチ。体重46キロ。O型。16歳。

好きな物 甘い物、陸上競技。

嫌いな物 虫、お化け。

趣味 編み物、絵を描く事。

敦の幼馴染の一人で未来の妹だが、全く似ていない。

小柄ながらスタイルが抜群に良いが、本人にとつてはコンプレックス。

学校の勉強は出来る方だが、あまり頭は良くない。

かなりモテるが、敦に惚れているため、告白はすべて断っている。

特に委員会にも部活にも所属していないため、放課後は基本的に敦と一緒に。

氷室光
ひむろひかる

パーソナルデータ 身長184センチ、64キロ。B型。17歳。

好きな物 体を動かす事全般。

嫌いな物 勉強。

趣味 歌を歌うこと。

敦の幼馴染の一人。

結構な金持ちの娘。

底抜けに明るく、誰からも好かれる。

他の二人に比べると運動は出来るが、部活は調理部。

反面、学校の勉強は出来ないが、知恵はある。

グラビア並のプロポーションだが本人にとつてはコンプレックス（というよりも、単純に邪魔だと思っている）。

また声もかなりハスキーダがそれは気にいっている。かなりモテるが、敦に惚れているため、告白はすべて断っている

七宮絵里

パーソナルデータ 身長167センチ、体重52キロ。A型。22歳。

好きな物 綺麗な物。

嫌いな物 マナーが悪い人。

趣味 料理。

敦の世話をするメイド。

元は社長令嬢だったが、会社が倒産寸前だった所を『TOWA』に救われた礼にと大人同士の意向で敦の世話することになった。一通りの家事は出来るが、朝に弱いため朝食の準備は敦に任せている（本人も気に入っている）

あかがねみさき 銅美咲

パーソナルデータ 165センチ。体重51キロ。O型。27歳。

好きな物 体を動かす事。

嫌いな物 軟派な男、虫。

趣味 編み物、ゲーム。

敦達の担任教師。

美人でスタイルもよく童顔なため、一人で町に行くとよくナンパされる。

学校でも同姓異性がかわらず人気は高い。

敦とは小さいころからの知り合いで、よく勉強を教えていた。もちろん未来達とも昔からの知り合い。

敦が小さいころに『甘い言葉は耳半分で受け止めろ』と教え、彼が

鈍感になつたきつかけの一つを作つた。

かざまきじゅんぺい
風巻順平

パーソナルデータ 身長183センチ、体重68キロ。B型。17歳。

好きな物 散歩。
嫌いな物 人付き合い。

敦の悪友。祖父や幼馴染三人より付き合いは短いが、四人よりも敦のことを理解している。

敦には劣るものの、かなりの金持ちの息子であり、人間の汚い部分を子供のころから見てきている。

光や萌乃をからかつて楽しんでいるが、基本的には仲は良いが、冗談が通じない未来は少し苦手（嫌いではない）。

敦は馬鹿でモテないと思っているが、困った時に頼りなる人物で、異性同姓かわらず好かれており、女性経験も歳のわりにはある。女性経験も含め秘密が多く、付き合いの長い敦や光達にさえ本心を出すことは滅多にない。

おとわじょういち
音羽昭一

パーソナルデータ 身長188センチ、体重82キロ、A型。55歳。

世界的大企業『TOWA』の社長。

見た目はとても孫がいるように見えないほど若々しく、筋肉隆々だが、喋りは年寄り臭い。

財界のみならず、政界にも通じており、彼の言動が日本を動かすと言つても過言ではない。

お茶目な一面もあるが早くに親を亡くした敦をかなり気にかけている。

ゆくゆくは才覚ある敦に社長を継いでほしいと願い、彼が変われるよう-sama様々な策を使う。

第十話 敦君と新しい生活

「あ タ 起き く い」

誰かの声がする。

「あつ ん、起きてくだ い」

女性の声だ。

「敦さ 起きて下せこ」

聞こ覚えがあるよつたないよつな

「敦さん、起きてください」

言われた通りに田を覚ます。

すると、田の前には美少女のビアップがあった。

「

頭が全く動かない。

「おはよウイヽギモーす、敦さん」

田の前の美少女がほほ笑む。

「 おはよウイヽギモーす」

オウムのようだそのまま返す。

少女は、なぜかメイドの恰好をしてくる。

「朝ご飯出来ますよ」

「あ、はいえ」

俺が返事をすると、少女はニコリと笑う。

ちゅうじずつ頭が働いてくる。

「むへ、朝はあひると起きなきやダメですよ~。」

「え? ああっと」

「まだ田が覚めませんか?」

「あちゅ、え?」

少女は困惑している俺を真剣な田で見る。

「田を覚ませてあげましょうか?」

少女はそのまま自分の顔を俺の顔に近づいて来る。

「ちゅ、ちゅうと待つてー。」

すんでのといひで昨日の記憶を取り戻す。

「田が覚めましたか？」

田の前の美少女 加瀬部さんが再びほほ笑む。

「ええっと まあ、何とか って言つか、なんて恰好してるんですか……」

「普通のメイド服ですよ~。」

「メイド服が普通じゃないんですね……！」

「いや、この恰好、お嫌いですか ？」

俺が叫ぶと加瀬部さんが悲しそうな表情になる。

「いや、嫌いとこつか 」

田のやつに困るといふか

「不満でしたら今すぐ脱ぎますナビ 」

加瀬部さんはいつも机の場で脱げないとある。

「ちよ、ちよっと待って、この脱がないで……。」

私は 敦さんでしたら見られても 「

「ダメだから…… 自分の部屋で脱いで……。」

なんとか加瀬部さんを追い出しつロビングに行くと、そこにはすでに出来立ての朝食が用意されていた。

それは、とても初心者に作れるとは思えないような物だった。

「凄い」

「お氣に入りましたか？」

着替えた加瀬部さんが訊いてくる。

「そりゃ もう、凄いですよー。早く絵里ちゃんも呼ばなこと

俺がそいつだと、加瀬部さんは少し驚いたような顔をする。

「あの人、いつもこんな感じなんですか？」

「こんな感じって まあこつも起きるのは遅いですけど」

「そう ですか」

「それと 『あの人』 なんて言い方はして欲しくないです

「え、あつ すいません」

加瀬部さんはいつも頭を下げる。

「それじゃ、私が読んできますから、敦ちゃんはいいで待っていてく

ださーー！」

「え、いや、俺が　」

加瀬部さんは俺が止めるのも聞かずに絵里さんの部屋に行く。
するとい、絵里さんは俺が起しきす時よりもシャキッとしながら部屋から出でられた。

「絵里さん、顔洗つてきたり？」

「は、はい　」

絵里さんはなぜか落ち込んだような顔をして洗面台に向かう。

「どうして起しきしたんですか？」

「別に、特別な事はしてませんよ

俺の質問に加瀬部さんはこいつと笑つて質問をまぐらかした。

朝食を食べ終え、俺が出かける支度をし、部屋を出ると、そのまま俺と同じ学校の制服を着た加瀬部さんが立っていた。

「え？」

「それじゃ、行きましょ！」

「ええっと　どうして彼女の恰好を？」

「どうして　学校に行くために決まっているじゃないですか」

加瀬部さんが悪戯っ子のような笑みを浮かべる。

「へ？　？」

状況を読み込めない。

「今日から、敦さんと一緒に登校です」

「それって」

俺の学校に転校して来る　　といつこと。

「これからようじくお願ひしますね」

「は？　はあー？」

「ちなみに、クラスもこいつですよ

加瀬部さんはそう言いながら俺にスルッと近づき、腕をからめる。

思いつたり胸が当たつている。

「ちよ、加瀬部さんー？」

「それじゃ行きましょうか」

「ちよ、ま、待ってください！…」

俺が叫ぶと加瀬部さんは立ち止まつてくれた。

「どうかしましたか？」

「い、いや、つていうか、色々と一緒に急展開なんんですけど

」

「だつて黙つてましたもん」

「な、なんで

「だつて

加瀬部さんは笑みを浮かべたまま、答えた。

「そつちの方が面白そうじやないですか

第十一話 敦君と幼馴染 + 1

「 なあ、敦」

「 何だよ」

「 その娘、誰だ？」

家の外に出た数秒後、当然のようすに家の前で待っていた光が質問する。

「 ああ、この人は 」

「 加瀬部梓です。敦さんのいいなず」

「 親戚！… 親戚だよ！…」

本当の事を言おうとする加瀬部さんを遮つて、光が質問する。

「 ちょっと訳があつてウチに住む事になつたんだよ」

隣で睨みつける加瀬部さんを無視してそれっぽい理由を話す。

「 一緒に住んでるのか？」

「 まあ、そりや俺の家だからな」

俺がそう答えると、光は俺をキッと睨みつける。

「それって 同棲って事だよな？」

「同棲つてか、同居だけどな。絵里さんもいるし」

「私はそっちの方がいいですけど」

俺が弁明しているのに、加瀬部さんが余計な事を言いながら俺の腕に抱き着く。

「敦 お前また」

光の肩がワナワナと震える。

「光？ どうかしたのか？」

「うっせえ馬鹿！！」

光が俺の顔面目掛けて弁当を投げ付けてくる。

かるうじて弁当はキャツチするが、光はそのまま走り去る。

「ちょ、光！？」

俺が呼びかけても、こっちを見ないで走る。

「面白そうな人ですね。友達ですか？」

「幼なじみですよ 早く追いかけないと」

「大丈夫なんじゃないですか？ あの人も学校に行くんでしょう？」

「まあ、そうですけど」

「そんなことより」

加瀬部さんは俺の方を向く。

口は笑つていて、目が全く笑っていない。

「何で親戚なんて嘘ついたんですか？」

「えっと それは」

なんと言えばいいか返答に困る。

そもそも自分でも何でごまかしたのかも分かつてない。

多分、そのまま言えば、また面倒な事になるからだと思つただけど
本当にそれだけなんだろうか？

光においていかれて、仕方なく一人きりで未来達の家に行くと、光、
未来、萌の三人がいた。

「お前ら待つてたのか？」

「聞きたいことがあるからね

」

未来はやつと加瀬部さんを見る。

「その人が 加瀬部さん？」

「はい、加瀬部梓です」

加瀬部さんはやつと頭を下げる。

今度は許婚の事は言わなかつた。

「椎名未来です。」これは妹の椎名萌乃。これは氷室光

「何で俺だけ”これ”扱いなんだよ」

「よろしくお願ひします」

「無視すんなよ！」

未来と光の、半ばコントのようなやり取りを、萌はオロオロとしながら、加瀬部さんは楽しそうにクスクス笑いながら見ている。

「ちょ、ちょっと二人共 ダメです」

「やつぱり面白いですね、光さん」

「それで、訊きたい事つて何なんだ？」

「別にたいした事じゃないんだけどね。どうしてわざわざこんな中途半端なタイミングで転校して来たのか、気になつたのよ。しかも、

わざわざ敦の家に住むつて、変じやない」

「転校の理由は一身上の都合。敦さんと同居するのではなく、家を借りるお金がないからですよ」

「だからって」「

未来はそこまで黙つと、何かを語つたような表情になる。

「 肇一也さんは、許してるので?..」

その質問で、今度は光が何かに気がついたような表情になる。

萌乃は全く話についていけないようだ、ただひたすらにオロオロしている。

「ええ、きちんとご承を得ました。もちろん、敦さんにも、繪里さんにも」

「 そう、ならしうがないわね。でも、ただの親戚にしてはスキンシップが過激すぎるんじゃない?..」

おそらく、未来は光からさつきの光景を聞いたんだろう。

「そんなことないですよ、私、敦さんのこと好きですから」

加瀬部さんは決まりきつたことを話すよつた軽やかさりと黙つただけだ。

三人は固まつたが、未来はいち早く正常に戻り（おそらく男女間の

それではないと判断したんだろう）、そのことには触れずに、俺の方を向いた。

「今度はあなたに質問。何で今日までこの事黙つてたの？」

未来はなぜか怒っているように見える。

「いや、黙つてたわけじゃねえよ。俺だつて昨日帰つてから知らされただんだ」

「へえー」「

「疑つてんのか？ なんなら今からシジイに連絡しても」

「別に疑つてないわよ。の人ならやりそりだし」

だつたらもうちょっとそれに相応しいリアクションをしてくれ

「ま、それならいいわ。行きましょうか」

未来はそう言つと、学校の方向に向き直す。

その瞬間、加瀬部さんが俺の腕に抱き着くようについて来る。

さつきと違つて、加瀬部さんは胸をより俺の腕に押し付けてくる。

その姿は、未来以外の一人にバツチリ見られていた。

「お前、また何やつてんだ！」

「 な、何やつてるんですか！」

二人が同時に叫び、未来もこじらを向く。

「 な、何を 」

「 じゃ、行きましょうか」

「 ちよつと待ちなさい！」

未来が珍しく感情的になる。

「 どうかしたんですか？」

「 どうかしてるだろ！ お前、何で敦に抱き着いてんだよ！..」

「 え、家族のスキンシップですよ」

「 だから、そんな過激なスキンシップがあるわけないです！..」

「 最近の家族はこれくらい」

「 やりないわよ！..」

顔を真っ赤にして叫ぶ三人。

加瀬部さんはクスッと笑う。

「 羨ましいんですか？」

三人の表情がピタッと止まつた。

「まあ、図星ですね。でも、敦さんは渡しませんけど」

加瀬部さんはそう言つとダッシュで走り始める。

「あ、ちよ、待ちなさい！」

「待ちやがれ！！」

「待つてたら遅刻しちゃいますよ」

「おのれを繕つておれ。」

四人が叫びながら走る。

加瀬部さんに拘まれてる俺も当然走らされる。

ちよ、加瀬部さん、今のもう一つ

「あ～、時間マズいですね
私は、早く行かなきゃなんて、かつ飛ばしますよ」

「人の話聞いてませんね！」

加瀬部さんはさらに速度を上げる。

今まで色々ありながらも、ゆつたつと週¹じて来た日常の姿は、どうもつかない。

第十一話 敷君と日常？の朝

「それじゃあ、私、教務室に行つて来ますね」

萌が自分の同級生達と一緒になつて俺達と別れた後、加瀬部さんは俺達に言つた。

「場所、分かるんですか？」

「ええ、まあ　あつ」

加瀬部さんは、そこで何かを思いついたような顔になる。

嫌な予感しかしない。

「でも、やつぱり不安なので、着いて来てくれますか？」

加瀬部さんはそう言いながら俺にぴったりとひつつく。

「まあ、いいですけど」

とくに断る理由もないし。

「私が案内するわ」

だけど、未来が一步前に出て加瀬部さんに言つ。

「え？」

「何か問題でも？」

未来が冷たく睨む。

「別に問題はないんですけど」

加瀬部さんは不満げに咳くと、寂しそうに俺の顔を見る。

これは 僕に断れといつ事か。

「なあ、みらい

「じゃあ、やつをひと行きましょ！」

未来は、俺の言葉を聞かずについつつと、加瀬部さんの腕を掴んで引っ張る。

当然、加瀬部さんにへつつかれている俺も引っ張られる。

「ちよ、未来！」

俺が未来を呼び止めると、未来はぱたっと止まる。

「……………なんにへつこてるのかしら？」

「何がですか？」

加瀬部さんが笑みを浮かべながらはげりかす。

「ほり行くぞ、敦」

今度は光が俺の腕を掴み、引っ張る。

当然、俺にくつづいている加瀬部さんも引っ張られる。

そこへようやく、加瀬部さんは俺の腕を離した。

「早く行かないと時間なくなるわよ」

未来はそう言つと、加瀬部さんの腕を掴んでつかつかと歩いて行く。

「ちゅう、ちゅう」と、早過ぎますー。」

加瀬部さんは引きずられるように連れていかかる。

いつたい何なんだ……？

「敦、あの美少女は誰なんだ！？」

俺が教室に入つた途端、順平が俺に詰め寄る。

「はあ？」

「お前と一緒にいたあのショートカットの美少女だよーー。こんな
パチモンじゃなくてーー。」

「誰がパチモンだーー。」

「お前その言い方だと自分が美少女だって言つてるよつもんだけ?
?」

いつも通り漫才のようなやり取りを始めかねない一人に一応ツッコミをいれる。

「で、誰なんだよ 新しい彼女?」

「は、は!?. そなのか敦!?.」

順平の冗談めいた言葉に、光が過剰に反応する。

「違つよ、ただの親戚 つてか、光にはそつ言つたよな

俺がそつ言つと、順平は希望を得たように田を輝かせ、光は安堵したように息を吐く。

「つまり、俺にも希望があるといつ

「お前じや無理だろ」

順平が全部言い終わる前に光がツッコミをいれる。

まあ、確かに、俺の許婚だしな

「いや、こいつみたいな女性経験のない男より、俺のような経験豊富な男の方に惹かれるんだよ、ああいうウブそな少女はー..」

順平が俺を指を差しながら力説する。

「見た目でしか判断しないな、お前」

「何言つてんだ、お前。女はまず見た目だろ」

順平が即答する。

「最低だなお前」

「人間のクズだな、クズ」

俺と光が殆ど同時に言つ。

「誰がクズだ！」

順平は光の言葉にだけ反応する。

「お前以外の何処にいるんだ、クズ」

「んだとー？」

順平が光を睨む。

いつもなら、ここらへんで未来が「うるさいー」と一喝して止めるのだけど、今は未来がいないから誰も止める人間がない。

「つてか、見た目100%つて事は、光とか未来とか萌とかでもいいのか、クズ」

俺も光に便乗してみる。

光を見ると、褒められたからか顔が耳の先まで真っ赤になつて、口をパクパクさせている。

「テメエまで俺をクズ扱いするんじゃねえ！」

いや、真意が分からんけど、言葉だけなら相当なクズ野郎だぞ
「つてか、萌ちゃんはまだ中身もしつかり女の子だけど、コレとか
未来とか中身女じやねえじやん？ そういうのはバス」

順平がペラペラ喋つている間に、未来が扉を開けて入つて來た。

「コレは中身男だし、未来なんか中身人間なのかも疑わぎやあッ！」

未来に気付かなかつた順平は、ものの見事に未来に蹴飛ばされた。

「何か言つたかしら」

未来は珍しく笑みを浮かべて順平に質問をする。

ただ、当然ながら目は笑つていない。

「　　いえ　　何も　　」

相当ダメージがデカイのか、順平はその場から動かず、手と口だけで否定した。

「ならいいけど　それで、何でこの子はバグつてるの？」

未来が光を指差す。

そこには、魂が抜けたかのようにな力なく座って、にやける光の姿があつた。

「ちょ、光!? どうかしたのか!?」

俺が光に話しかけても、光はよく分からぬ言葉を呴き続ける。

なんとか聞き取れたのは、「敦が」とか、「綺麗」という言葉。

「ああ、そう言ひ事」

俺が光の「うわ」とを聞いている間に、未来は倒れたままの順平からいきさつを聞いたようだつた。

「敦、心配しなくて大丈夫よ。すぐに『直る』から」

「治る?」

「そ、『直る』」

未来はそう言つと、光を抱き抱えて教室を出ようとした。

「あ、そうだ」

未来は何かを思い出したらしく、一いちを振り返つた。

「敦、ちよつといい?」

「何？ 光の治療に俺が必要なのか？」

「ちうじやないわ。むしろ邪魔。とにかく来て」

俺は未来に言われた通りに未来についていく。

しばらくして、人気がない場所に来た。

「いいらへんでいいかしら」

未来はそう咳きながら、お花畠にトリップしたようなひょっと危ない笑みを浮かべる光を地面に寝せる。

「何がだ？」

「いの話よ 敦、ここ立て」

未来は、自分の一歩か二歩くらい離れた所に立たせる。

「これでいいのか？」

返事はなかつた。

未来の足が消え、ちらりとスカートの中身が見えたと思つた時には、俺の体が空中に浮いていた。

そのまま、地面に叩きつけられる。

「ま、そういう事だから」

未来はすつきりしたような表情でまた光を抱き抱えて去つて行く。

何なんだいつたい

第十二話 敦君と幼馴染と先生と、転校生

教室に戻る途中、銅先生と加瀬部さんに出会った。

「音羽、いつまで外で遊んでいるんだ。もうHR始まるぞ」

「すいません」

外に出てたのは、俺のせいじゃないけど

「敦さん、何処行つてたんですか？」

「何処つていうか」「

説明しにくくな

「もう仲良くなつたんだな。さすがに同じ家に住んでいるだけある
な」

銅先生がさらつと俺達の秘密を言つてしまつ。

「え、え、えうして」「

知つてるんですか、と聞こうとしたけど、銅先生は”先生”なんだ
から当然生徒の住所なら知つてるはずだと思い、聞くのを止める。

だけど、銅先生が告げたのは予想外の物だった。

「昭一さんから聞いてたからな。許婚がそつちに行くからよろしく

頼むと

「 はい？」

「結構心配してたぞ、お前と加瀬部が仲良くなれるかどうか」

あのジジイ

「まあ、心配する必要なかつたみたいだな。もう噂になつてゐた
いだし」

銅先生が意味ありげにニヤツと笑う。

「どんな噂ですか？」

「登校中に抱き着いていちやつこてたんだろ？」

「はい！？」

何でそんな馬鹿げた噂が！？

「なんだ、してないのか」

銅先生はつまらなそうな顔をする。

「するわけないでしょ！ 誰がそんな事言つてゐんですか！？」

「さて、誰だろ？ ボクが聞いた相手はボクの受け持つてる生徒
じゃなかつたし」

銅先生は興がそがれたとでも言いたげに適当な感じで答える。

「私は構いませんよ？」

加瀬部さんはそう言いながら、見かけよりも大きな胸を押し当てる
ように、俺に抱き着いてくる。

いい加減に理性が

「か、加瀬部さん！」

「なんだ、もうそこまで仲良くなつたのか」

「なつてません！！ 加瀬部さんもふざけないで下せーーー！」

「ふざけてませんよ。私は本氣です」

「とにかく！ 離れて下さい！」

俺は加瀬部さんを引き離す。

「私の事、嫌いですか……？」

加瀬部さんが不安そうな顔で俺を見る。

「いや、嫌いとかそういう事じゃなくて、ここだと人の目とかあり
ますし」

俺は一縷の望みをかけて銅先生を見る。

しかし、その望みが絶たれたことは一瞬で分かつた。

銅先生はニヤリと笑っていた。

「ボクは構わないぞ？ むしろ奨励したいくらい」

やつぱり

「ほら、先生もこう言つてますし」

加瀬部さんは一コツと笑うと、また抱き着こうとしたその時。

「何馬鹿な事言つてるんですか」

「お前ら何してんだよ！」

未来と、別な世界から帰つて来た光が俺の後ろに立つていた。

加瀬部さんの動きがぴたつと止まる。

「光、もう大丈夫なのか？」

俺が訊くと、光はやや赤面しながら、

「あ、ああ！ 大丈夫だぜ！」

と答える。

あんまり大丈夫そうじゃないけど、まあ本人がそう言つてるんだからそつなんだろう。

「二人共、まだ教室に入つてなかつたのか？」

「生徒に不純異性行為を推進させるダメな教師に敦が毒されよつとしているので」

未来が無表情で返す。

「何だ、気に障つたのか？」

そういう問題じやないだろ？ナビ

「違いますよ」

未来はそつ答えると、

（先生に何を言つても無駄でしょ？）

と小声で付け加える。

「何か言つたか？」

「いえ、何も」

銅先生が少し表情を変えるが、未来は相変わらずの無表情で答える。

「もう行きませんか？ もうすぐチャイムが鳴りますよ」

俺は四人に言いながら時計を指差す。

すでにエラまで二分切っていた。

「うわ、やべーーー！」

光が一番に駆け出す。

「光！ 走るな！」

銅先生が言つても、説得力がねえ

「未来、俺達も行こー！」

「別に、歩いても間に合つわよ。どのみち、先生がこなきゃ始まらないし」

運動嫌いの未来が歩きながら、嫌そうな顔で返事をする。

「なら、私達も走るか」

れつ毛の注意はどーにーーー？」

「私は敦さんがいればどつちでもいいですけど

加瀬部さんがあつ言いながら、そりげなく俺にくつづく。

「 何してるの？」

未来は立ち止まり、加瀬部さんに絶対零度並の冷たい視線を浴びせる。

「羨ましいんですか？」

「やついう事じやないでしょ、うへー。」

一人の間に火花が散る。

「二人共、頼むから仲良くなしてくれよ」

「別に、仲悪くないわよ」

「どうが？」

「まあ、敦さんが言つなら」

加瀬部さんは渋々といった感じで言いながら、さつきよりも俺にくつこいつとする。

「だから、あんまり抱き着かないで下さい！ 未来もいるんですからー！」

「未来さんに見られたら嫌なんですか？」

加瀬部さんが不満げな声で訊いてくる。

「未来に限らず、誰かに見られるのが嫌なんです」

「そうですか？」

加瀬部さんは残念そうな顔をしながら俺から離れる。

途端に罪悪感に襲われる。

「あ、加瀬部さん、やつぱつ

「えいひ、こへわよ

俺が全部を伝える前に、未来が俺の手を掴んでやや早足で歩き始める。

「ちよ、未来？」

「いわゆる

未来が問答無用で黙りせりふ一言を突き付ける。

「歩いて行くんじゃなかつたでしたっけ？」

加瀬部さんも俺達の速度に合わせて歩く。

「何言ひてるの、歩こてるわ」

未来は加瀬部さんを見る事なく言ひ。

「見かけによらず歩くのが早いですね」

「誰かさんと違つて効率がいいからな

いい加減仲良くしてくれ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3796s/>

敦君の嫁探しっ！

2011年11月20日01時19分発行